

# 和歌山の先人たち

第21回

しま どの じゅん じ ろう  
島 菌 順 次 郎

— 脚気を救うビタミンB<sub>1</sub> —

ある夏の昼さがり、暑い日ざしを浴びて紀の川河口付近で、ドジョウを捕って遊んでいる子どもたちがいた。那賀郡池田村（打田町）から遊びにきた子どもたちである。

その中に、ひときわ体が大きく頑丈（がんじょう）そうで大変上手に捕る子がいた。先程からその様子をじっと見つめていた野崎村（和歌山市）の漢方医、島菌恒斎は、「あんなに勘（かん）のよい子を養子にほしい。」と、ひそかに心にとめた。この日の出合いがもとで、その子は、後に島菌家の養子に迎（むか）えられることになった。

脚気の原因は、ビタミンB<sub>1</sub>の欠乏症によることを発見した、島菌順次郎の少年時代のことである。

順次郎は、明治十年、和歌山で須藤暢の次男として生まれた。五歳で父に死別したので、兄の丑彦に従って池田村に移り住んだ。順次郎はたいへん素直で、いい付けには、ひとことの口答えをしたこともなく、いつもにこにこしてよく教えを守った。だ

から一度も叱（しか）られたことがないというほどの子どもであった。それと同時に、たいへんよく勉強もした。小学校で習う学科の予習、復習はもちろん、自分で漢字を独習し、



英語は兄に教えてもらおうという勉強ぶりであった。ちょうど春の若草が太陽の暖かい光を受けて、ぐんぐん成長するように、順次郎の学力は、めきめき向上していった。

高等小学校を卒業して和歌山中学校へ進学するころには、既に、日本外史や十八史略を暗記し、英語は、ナショナルリーダーの三巻を、すらすらと読める実力をもっていた。当時の和歌山中学校の制度は、予備科と本科に分かれていて、予備科の入学試験に合格した者だけが、本科への編入試験が受けられるようになっていた。しかし、順次郎は予備科の入学試験の成績が抜群であったので、その実力が認められて、すぐに本科への入学が許された。このように順次郎は、中学校へ入学する時から、優秀な成績で、先生たちをびっくりさせた。さらに正規の授業を受けるようになってからは、その成績は、全科目すべて満点で、特に数学、理科には優れた力をもっていたので、順次郎には先生がいらないと、いつも担任



の先生の舌を巻かせた。

彼の性格は柔順温和であり、落ち着いた態度で口数が少なく、平素の行いにも、非のうちどころがなかった。しかも勉強については、たいへん熱心で優秀であったので、当時の和歌山中学校の先生は、「順次郎のような生徒を教えられる自分は、教師として誇りに思う。」といつて、喜んだという。島蘭恒齋がかつて見込んだ少年は、このような秀才に育つていった。そして順次郎は、和歌山中学校に在学中に島蘭家の養子に迎えられるのであった。

明治二十九年（一八九六）、最優秀の成績で和歌山中学校を卒業した順次郎は、母校の推薦によって無試験で、東京の第一高等学校の第三部へ入学した。当時の第一高等学校は、中学校の最優秀者を無試験で仮入学させ、一年間、予科でドイツ語を教え、その翌年に試験をした後、入学を許す制度になっていた。それで、彼は全精力をドイツ語習得に傾け、猛勉強の末に、入学確定試験を受けた。主席で試験に合格したことはいうまでもない。

三十二年、順次郎は、優秀な成績で第一高等学校を卒業し、すぐに東京帝国大学の医科に進んだ。大学では「和歌山の牟婁病」の発見者として知られていた三浦謙之助教授の指導をうけた。

三十七年、大学を卒業したが、日露戦争中であったので、彼はすぐに志願して軍医



となり、戦病者の治療に従事した。終戦後、再び大学にもどり、三浦内科の助手となった。

三浦教授のもとで研究を重ねた順次郎は、明治四十三年、三浦教授の世話によって自費でドイツに留学し、四年間、内科の研究に没頭した。ドイツ留学を終えて帰国後、岡山医学専門学校の教授になり、この間、「鳥の小脳について」という学位論文を書き、医学博士号を授けられた。三十八歳のときであった。当時は学位をもった人は非常に少なかった。それだけに、医学者としての順次郎の地位が、しだいに認められるようになった。その後、京都帝国大学から招かれて、教授となり、内科部長をつとめたが、大正十三年（一九二四）に、東京帝国大学の三浦教授が退官したあとをうけつ

ぎ、数多くの先輩を抜いて、母校の教授になった。そして、昭和四年（一九二九）には、日本で初めての交換教授として、ドイツに派遣され、ベルリン大学で一年間講義をするなど、大学での彼の活躍はめざましいものがあつた。

順次郎の研究分野は、主として神経系統病であり、特に脚気の原因をつきとめる研究に熱心であつた。脚気は、玄米や半つき米を食べていた時代には、ほとんどなかったが、明治、大正の時代になって、白米を常食とするようになったころから、この病気にかかるものが多くなり、毎年二万人もの人が死に、国民病とまでいわれるようになった。それにもかかわらず、当時学会では、その原因をつきとめるまでには至っていなかった。それで、脚気は伝染病だとか、中毒によるものだとかの、種々の説が入り乱れていた。こうした中で、彼は病理、解剖、症候から、脚気はビタミンB<sub>1</sub>の欠乏によるものとの結論を得て、昭和九年（一九三四）、「脚気はビタミンB<sub>1</sub>の欠乏が主因」という学説を発表した。この論文は、それまで色々な説のある病因論に結論をくだし、全国の脚気でなやむ患者に大きな福音をもたらすという世界的な功績を残した。

昭和八年から、順次郎は東京帝国大学附属病院長をつとめ、昭和十二年（一九三七）、六十歳でその輝かしい生涯を閉じた。